様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２５２４
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２１８９

研究課題名（和文）哲学・倫理学を取り入れた中学校の「道徳科」授業の開発

研究課題名（英文）Developing curriculum of philosophy-based / ethics-based moral education in Japanese junior high school

研究代表者
土屋　陽介（Tsuchiya, Yohsuke）

開智国際大学・教育学部・准教授

研究者番号：４０８０６４９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、哲学・倫理学を取り入れた中学校の「道徳科」授業の開発に取り組んだ。本研究の中核的成果は、現役中高教員8名を研究協力者に迎え、哲学対話とアクティブラーニングの要素をふんだんに取り入れた中学校の「道徳科」授業のための教材集『中学道徳ラクイチ授業プラン』を刊行したことである。以上に加えて、中学校の「道徳科」授業で活用可能な哲学・倫理学に関する教材・図書を3冊刊行した。また、哲学対話を取り入れた中学校の「道徳科」授業の実践事例をまとめた単著『僕らの世界を作りかえる哲学の授業』を刊行し、哲学の道徳教育への応用可能性を哲学・教育学研究者、学校教員、一般市民など幅広い対象に向けて発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究を通して、哲学・倫理学（特に哲学対話の手法）を取り入れた中学校の「道徳科」授業の方法論を、教材開発を伴う形で具体的に示すことができた。このことは、本研究の研究期間中に全面実施された「道徳科」において重点化されている「考え、議論する道徳」に対応可能な新たな教育手法を確立するものであり、特に実践的な道徳教育研究の領域において大きなインパクトを与えた。また、哲学・倫理学の学校教育への応用可能性を授業開発という具体的なレベルで提示することによって、哲学の応用研究に関する新たな領域を開拓し、哲学・倫理学の研究対象の拡大にも大きな貢献を果たした。

研究成果の概要（英文）：In this research project, the investigator has developed the philosophy-based and ethics-based moral education curriculum in the Japanese junior high school. One of the key achievements is the publication of the book titled "Chugaku Dotoku Rakuichi Jugyo Plan (in Japanese)." The book showcases various on-the-ground teaching materials for junior high school moral classes, with a specific focus on the "Community of Inquiry Approach" developed in the field of Philosophy for Children. The book was co-authored with eight schoolteachers who are also the collaborators of the project. Furthermore, the investigator published the single-authored book titled “Bokurano Sekaiwo Tsukurikaeru Tetsugakuno Jugyo (in Japanese),” where the investigator makes a case for the value of introducing “Community of Inquiry Approaches” in moral education. Through publication of these books, the potential of application of philosophy to moral education gain wider public as well as academic recognition.

研究分野：子どもの哲学（Philosophy for Children）・応用哲学・現代哲学

キーワード：子どもの哲学　哲学対話　道徳教育　考え、議論する道徳　中学校　教材開発　哲学　倫理学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究を開始した 2018 年は、2015 年 3 月の学習指導要領の一部改訂に基づき、中学校で「特別の教科　道徳」（以下「道徳科」と略記）の授業が全面実施されるようになる 2019 年度を目前に控えたタイミングであった。この新しい道徳教育について、2016 年 12 月の中央教育審議会の答申は、「答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」へと転換を図る」ことを明記しており、これに伴って中学校の道徳教育は、読み物教材を用いて「道徳的心情」の涵養を図る従来型の内容から、答えが一つに定まらない道徳的問題について「考え、議論する」ことで「道徳的判断力」の育成を図る新しい内容へと、そのあり方を大きく変貌させることが見込まれていた。こうした流れを受けて、当時の道徳教育の研究者や小中学校教員の間では、「考え、議論する道徳」に対応する道徳授業の指導方法や評価方法の開発が急ピッチで進められていた（西野・鈴木・貝塚 2017）。

一方で、本研究の開始前後にあたる 2010 年代の後半は、哲学・倫理学に固有の思考法や対話法を教育に応用する「子どもの哲学（Philosophy for Children）」「哲学対話」と呼ばれる教育手法が日本国内で注目を集め、様々な校種の学校で急速に実践されるようになった時期でもあった（Kono, Murase, Terada, Tsuchiya 2017; p4c みやぎ・出版企画委員会 2017; 土屋 2019; 豊田 2020）。本研究の代表者自身も、研究開始の時点では首都圏の私立中高一貫校に教諭として在職しており、哲学対話の方法論を取り入れた中学校の道徳授業の開発・実践を行っていた。当時はこうした取り組みが、小中高校の教員や教育学研究者（特に道徳教育学や社会科教育学などの研究者）に注目されているだけでなく、哲学・倫理学の研究者の間でも応用哲学・臨床哲学の具体的な実践の一つとして関心を集めていた。

２．研究の目的

本研究は、上記のような時代的背景の下で、「哲学・倫理学に固有の思考法や対話法を取り入れた「考え、議論する道徳」の授業は具体的にどのように構築することができるか」という問いを探究のための中核的問いとして設定し、哲学・倫理学（特に哲学対話の方法論）を取り入れた中学校の「道徳科」授業の具体的手法を開発することを目的として研究を遂行した。

３．研究の方法

以上の目的を達成するために、本研究では次の 4 つの研究小課題を設定した。課題ごとにそれぞれ異なるアプローチで研究に取り組み、そこで得られた知見を授業づくりに活かすことによって、哲学・倫理学に固有の思考法や対話法（特に哲学対話の方法論）を取り入れた中学校の「道徳科」授業の具体的な方法論を確立していった。

（1）哲学対話教育（子どもの哲学）に関する調査・研究

哲学・倫理学に固有の思考法や対話法を取り入れた道徳教育の方法論を開発するために、国内外の哲学対話教育（子どもの哲学）について、実践面・理論面の双方に関して調査・研究を行った。

① 国内外で取り組まれている先行実践について、特に道徳教育の中に哲学対話を応用している実践事例を中心に情報収集を行った。
　＜１＞国内外の関連文献を調査し、先行実践に関する情報を収集した。
　＜２＞学会等での発表・報告の聴講を通して、先行実践に関する情報を収集した。
　＜３＞実践が行われている学校を訪問して授業見学を行い、先行実践に関する情報を収集した。
　＜４＞実践者に対して聞き取り調査を行い、先行実践に関する情報を収集した。

② 哲学対話（子どもの哲学）の教育思想・教育理論を検討し、哲学対話教育の理念を正確に理解するとともに、それに向けられた批判的議論の検討を通して、哲学対話の方法論を道徳教育に応用することの可能性と限界（危険性など）を明らかにした。

（2）道徳教育（徳の教育）に関する調査・研究

道徳教育の方法論を開発するという研究目的に照らして、道徳教育それ自体について教育学および哲学のそれぞれのアプローチを用いて研究を行った。

① 道徳教育の現状のあり方とその歴史、制度、先行実践などについて、教育学的な視点から文献調査を中心に研究を行った。

② 道徳教育の理念について哲学的なアプローチを用いて分析を行い、特に「道徳（moral virtue）」だけでなく「知的徳（intellectual virtue）」も含み込む「徳の教育」の視点から、徳を教えるとはどのようなことかに関する反省的・思弁的考察を行った。（以上の研究は、本研究の代表者が分担研究者として加わっている科学研究費助成事業「哲学、教育哲学、教育実践を架橋した共同研究による新たな徳認識論の理論の構築」（基盤研究（B）：20H01178）の研究内容とも部分的に重なるものである。）

（3）哲学・倫理学（特に哲学対話の方法論）を取り入れた中学校の「道徳科」授業のための教材開発

（1）・（2）で行った調査・研究を踏まえて、本研究の目的達成に直接寄与する中学校の「道徳科」授業のための教材開発を行った。現場の授業で実際に活用可能な教材を作りあげるために、当時現役の中学校・高校の教員であった 8 名を研究協力者に加えたプロジェクトチーム「道徳科カリキュラム検討会」を発足させ、新型コロナウイルスの感染拡大に対応して、主にオンラインでミーティングを重ねて教材を作成した。

（4）哲学・倫理学を道徳教育に応用する可能性について広く社会一般に情報発信する啓蒙活動・アウトリーチ活動

本研究を通して明らかになった哲学・倫理学の道徳教育への応用可能性（およびより広く、哲学・倫理学の学校教育全般への応用可能性）について、その成果を一般市民向けの講演会や学校教員を対象とした研修会・研究会などで繰り返し広く発信するとともに、その内容を新書にまとめることで、非研究者である学校教員、子育て中の親などを含む社会一般に対して幅広くアピールした。

４．研究成果

「3」で詳述した方法（研究小課題）に従って研究を遂行した結果、本研究は数多くの研究成果を上げることができた。本研究を通して得られた研究成果のうち主なものを以下に記す。

（1）に関する成果

①について

＜２＞哲学対話教育（子どもの哲学）に関する世界最大規模の国際学会 ICPIC（International Council of Philosophical Inquiry with Children）の第 19 回大会（2018 年・コロンビア共和国のボゴタにて開催）および第 20 回大会（2022 年・日本の東京にて開催）に対面で参加し、哲学対話の方法論を活用した道徳教育の実践事例を世界各地から幅広く収集することができた。また両大会において、日本の中学校の「道徳科」授業の中で実践されている哲学対話の様子を英語・日本語の両言語で報告し（“Repertoires of Philosophical Inquiry: A Practical Application of P4C for Various Purposes”・「P4C が学校の中で根付くとはどういうことか：開智学園における「哲学対話」の 10 年間の歩みの検証を通して」）、そのことを通して、哲学・倫理学を取り入れた日本独自の道徳教育のあり方を広く国内外の研究者・実践家に向けて発信することができた。学会等での同様の実践事例の収集・発信は、本研究の期間中に開催された応用哲学会や日本哲学プラクティス学会の大会などでも行うことができた。ただし、新型コロナウイルスの世界的感染拡大の影響を受けて、特に海外の実践事例の収集に関しては、研究開始当初の見込みに比べて十分な成果を上げることができなかった。

＜３＞お茶の水女子大学附属小学校の訪問（2018-2022 年・含むオンライン授業見学）や、岐阜大学附属小中学校の訪問（2022 年）などを通して、哲学対話を取り入れた小中学校の授業を実際に見学し、学校教育の中で取り組まれている哲学対話の先進的な先行実践に関する情報を直接収集することができた。ただし、新型コロナウイルスの世界的感染拡大の影響を受けて、研究開始当初に予定していた海外の実践校の訪問・授業見学は断念せざるをえなかったほか、国内の実践校の訪問・授業見学も十分に行うことはできなかった。

＜４＞「p4c かたろうかい 2018」（2018 年・神戸大学附属中等教育学校）、「長野県の哲学教育を考える会」（2019 年・長野県立長野図書館）、「佐渡 p4c おけさ 2022」（2022 年・あいぽーと佐渡）などの、小中高校で哲学対話教育に取り組んでいる実践者が全国各地で開催している会合に出席して聞き取り調査を行い、先行実践に関する情報を収集することができた。ただし、新型コロナウイルスの世界的感染拡大の影響を受けて、国内外の実践者に対する聞き取り調査に関しては、研究開始当初の見込みに比べて十分な成果を上げることができなかった。

②について

哲学対話の教育理論を分析し、哲学対話が道徳教育に貢献するメカニズムを理論的なレベルにおいて明らかにした上で、その研究成果を日本倫理学会・第 72 回大会（2021 年・オンライン）において「哲学対話はなぜ道徳教育の役に立つのか？」として発表した（主題別討議「倫理的思考と道徳教育」）。また、その発表内容をさらに発展させて論文にまとめ、「知的な安全性について：哲学対話を道徳科の授業の中に取り入れることの可能性と危険性」（2022 年）を『倫理学年報』第 71 集に寄稿した。以上の論文では、哲学対話教育の理念に関する十分な理解を欠いたまま実践を行うことが様々な弊害や危険性を教室の中に招き寄せてしまう可能性を指摘し、哲学対話を道徳教育の中に安易かつ性急に導入しようとする動きに対する問題提起も行った。

さらに、哲学対話を徳の育成のための単なる教育的「道具」とすることの問題性を、教育哲学

者ガート・ビースタの論考を手がかりに考察し、日本倫理学会・第 73 回大会（2022 年・慶應義塾大学）において発表した（共通課題「対話」）。その発表内容をさらに発展させて論文にまとめ、「哲学対話が「哲学」と「対話」の実践であるために：ガート・ビースタの哲学対話教育批判の検討を通して」（2023 年）を『倫理学年報』第 72 集に寄稿した。

（2）に関する成果

①について

日本における道徳教育の歴史と現状や、本研究の研究期間中に行われた道徳教育に関する制度改正（道徳の教科化と「考え、議論する道徳」への質的転換）について文献調査を通して理解を深め、それを踏まえて日本の道徳教育の枠組みの中に哲学対話を導入するための具体的方法を教育学的なアプローチを用いて明らかにした。

荒木寿友・藤井基貴（編著）『道徳教育（新しい教職教育講座　教職教育編　7）』（2019 年）の第 8 章・第 2 節「哲学対話を取り入れた道徳科授業の学習指導案例」では、哲学対話を取り入れた中学校の「道徳科」授業の学習指導案を例示し、哲学対話を取り入れた授業のねらいや、内容項目との対応、使用教材、学習指導過程などを具体的に示した。

日本道徳教育学会全集編集委員会（編著）『新道徳教育全集　第 2 巻　諸外国の道徳教育の動向と展望』（2021 年）の第 24 章「子どもの哲学（P4C）」では、子どもの哲学の創始者の一人であるマシュー・リップマンの教育理論を参照して、哲学対話を道徳教育の枠組みの中で展開させる可能性を示した。

さらに、高校における道徳教育の中核科目として位置づけられている「公民科」と、そこにおける哲学・倫理学の取り扱いについて分析し、その研究成果を「高校公民・中学社会の「倫理的価値の判断」における規範倫理学の影響」（2022 年）と「高校公民・中学社会の実践的指導において新しく求められている教師の哲学的・倫理学的資質」（2022 年）の二つの論文にまとめた。以上で展開した分析を踏まえて、『現代思想』2023 年 4 月号＜特集＝カルト化する教育＞に論文「哲学はどのような意味で現代日本の学校教育に求められているのか：「方法論」としての哲学と、「知識」としての哲学」（2023 年）を寄稿した。

②について

道徳教育を哲学的な視点から捉え直し、「道徳（moral virtue）」だけでなく「知的徳（intellectual virtue）」も含み込む「徳の教育」の観点を確立した上で、分析哲学の文脈で近年盛んに研究されている徳認識論（virtue epistemology）と、それを教育実践に応用する様々な先行研究（知的徳の教育プロジェクト）を参照して、哲学・倫理学教育（特に哲学対話教育）と徳の教育（特に知的徳の教育）の関係を明らかにした。

『哲学』第 69 号に寄稿した論文「「子どもの哲学」が問いかけるもの：その教育理論と哲学的問題」（2018 年）では、子どもの哲学の教育理論に含まれている重要な哲学的問題の一つとして徳認識論を挙げることができることを明らかにした。以上の研究を発展させて、知的徳の教育を現代社会に適応するための人格育成として捉えることの是非や、そのことと批判的思考力教育（特に批判的に思考する姿勢や態度の涵養）との関係などについて哲学的な観点から考察を深めて論文にまとめ、「「考える人を育てる教育」はどのようなものであってはならないか：知的徳の教育の観点から」（2021 年）を『フィルカル』第 6 号・第 3 巻に寄稿した。

（3）に関する成果

本研究の研究期間を通して、哲学・倫理学（特に哲学対話の方法論）を取り入れた中学校の「道徳科」授業の教材集を 2 冊作成し、どちらも学校教員向けの一般書籍として教育書専門出版社である学事出版より刊行した。

『中学道徳ラクイチ授業プラン』（2021 年）は、哲学対話とアクティブラーニングの要素をふんだんに取り入れた中学校の「道徳科」授業のための教材集として作成された。作成にあたっては、中学校の「道徳科」授業で実際に活用可能な教材集とするために、当時現役の中学校・高校の教員であった 8 名（中学校の「道徳科」の枠組みの中で哲学対話教育に深く携わった経験のある教員複数名を含む）に協力を仰いだ。「ねらい」「学習指導過程」「指導上の留意点」「ワークシート」から構成される一時間完結型の授業プランを 50 種類作成し、その中で中学校学習指導要領で定められている「道徳科」の学習内容（22 個の内容項目）の全てが扱われるように構成した。また、各教科書会社が作成した検定教科書を使用することのできる授業プランも 12 種類作成し、さらに、学期末・学年末の評価に使用することのできる授業プランも 6 種類作成した。本書は、本研究の（1）（2）で得られた研究成果を活かして、哲学・倫理学に固有の思考法と対話法を取り入れた「考え、議論する道徳」の授業プラン集となっており、本研究の研究目的の達成に直接貢献する中核的成果物となった。2023 年には、本教材を使用して中学校の「道徳科」授業を実践した現役中学校教諭の研究協力者に聞き取り調査を行い、教材の利点と欠点を分析することで続編の作成のための準備とした。

以上に加えて、同じく学事出版より『まいにち哲学カレンダー』（2018 年）を刊行した。本書は、小中学校の「道徳科」授業の中で「考え、議論する」ための素材を提供する日めくりカレン

ダー形式の教材である。本研究の（1）で得られた研究成果を活かしつつ、本研究の代表者が中高一貫校の教諭として中学校の「道徳科」で哲学対話教育を実践してきたそれまでの経験の蓄積も踏まえて、教材に収録する哲学的・倫理学的な問いを選定した。また、「道徳科」授業で使用可能なワークシートも収録することで、哲学・倫理学を専門的に学んだことのない小中学校教員でも哲学・倫理学のエッセンスを取り入れた「道徳科」授業を行うことを可能にした。

以上 2 冊の教材集の刊行は、哲学・倫理学を取り入れた中学校の「道徳科」授業を行う上での具体的な方法論を提供するものであり、「考え、議論する道徳」における哲学・倫理学の貢献可能性を具体的に示す重要な成果物となった。これらに加えて、本研究の研究期間中に『この世界のしくみ：子どもの哲学 2』（2018 年）と『5 歳からの哲学：考える力をぐんぐんのばす親子会話』（2018 年）の 2 冊の子ども向けの哲学・倫理学読み物の刊行にも携わった。前者は、本研究の代表者が執筆担当の一人を務めている「毎日小学生新聞」の週刊連載「てつがくカフェ」を書籍に形にまとめなおしたものであり、後者は、イギリスの哲学者と学校教員が子ども向けに執筆した対話形式の哲学エッセイを日本語に翻訳したものである（本研究の代表者は、日本語監修の立場で本書の作成に関与した）。以上の 2 冊はあくまでも読み物形式の哲学・倫理学の入門書であり、学校での使用を意図して作成されたものではないが、子ども向けに書かれているため小中学校の「道徳科」授業で教材として活用することも十分可能であり、その意味で本研究の目的達成に間接的に貢献する成果物となった。

（4）に関する成果

本研究の代表者が中学校「道徳科」で実践してきた哲学対話の授業の内容および方法の紹介をはじめとして、子どもの哲学・哲学対話と呼ばれる教育実践の国内外の歴史・理念・動向等の解説、それを日本の「道徳科」の枠組みの中に導入する可能性の検討、哲学カフェをはじめとした哲学プラクティスの紹介などを含んだ、哲学対話教育全般に関する入門書『僕らの世界を作りかえる哲学の授業』（2019 年）を新書の形式で刊行した。本書は学校教員をはじめとして、子育て中の親や一般の社会人など幅広い読者を想定して執筆された一般書であり、本研究を通して明らかになった哲学・倫理学の道徳教育への応用可能性（およびより広く、哲学・倫理学の学校教育全般への応用可能性）について、社会一般に対して幅広くアピールする成果物となった。

本研究の内容を学校教員を含む非研究者に向けてわかりやすく紹介する啓蒙活動・アウトリーチ活動は、本研究の研究期間を通して繰り返し行ってきた。その中でも特に、管理職教員を主な対象とする研修誌『教職研修』2019 年 11 月号に、メディアリテラシー教育に関する論考「メディアリテラシーとしての「対話的な学び」」（2019 年）を寄稿し、哲学的な対話技法の教育が情報化の進む現代社会の学校教育に求められることを明らかにしたことと、中学高校の養護教員を対象にして哲学対話教育の概要とそのカウンセリングへの応用に関する講演を行い、その内容を同会会誌上で「哲学対話ってなに？：哲学対話とカウンセリングマインド」（2021 年）として公開したことが主要な成果となった。

本研究は、新型コロナウイルスの世界的感染拡大の期間を挟んで実施されたため、特に海外の哲学対話教育に関する訪問調査・聞き取り調査に関しては、当初の計画通りに研究を遂行することができなかった。また、緊急事態宣言下で国内を含めて移動の自由が制限された影響を受けて、研究期間を 1 年間延長せざるをえなかった。

そのような状況の中で、本研究では研究協力者とオンラインミーティングを通して緊密な連携を維持し続け、ICT 機器を駆使して協働することで、研究開始当初に目標としていた哲学対話の方法論を取り入れた中学校の「道徳科」授業の教材集の刊行を含め、数多くの成果物を世に出すことができた。また、先行実践の情報を収集するために予定していた国外・国内の学校の訪問調査と、そのために確保していた予算・時間を、文献調査を中心とした研究に振り替えて使用したことで、哲学・倫理学を教育実践に応用することの意義それ自体を問い直す批判的で哲学的な研究も進めることができ、そうしたテーマに関しても複数の成果物を刊行することができた。

さらに、本研究の過程で着想した教職の専門性と教職倫理学の構築可能性に関する問いを基盤として、新たな研究プロジェクト「教職の専門性の解明と、それに基づく教職倫理学の構築のための学際的な基礎的研究」を立ち上げることもできた。同研究は 2023 年度より科学研究費助成事業（基盤研究（B）：23H00563）に採択されており、本研究から派生した発展的研究として継続して取り組む予定である。

＜引用文献＞

土屋陽介『僕らの世界を作りかえる哲学の授業』青春出版社、2019。
豊田光世『p4c の授業デザイン：共に考える探究と対話の時間のつくり方』明治図書出版、2020。
西野真由美・鈴木明雄・貝塚茂樹（編）『「考え、議論する道徳」の指導法と評価』教育出版、2017。
p4c みやぎ・出版企画委員会『子どもたちの未来を拓く探究の対話「p4c」』東京書籍、2017。
Kono, Tetsuya., Murase Tomoyuki., Terada Toshiro., & Tsuchiya Yohsuke. “Recent Development of Philosophical Practice in Japan.” *Philosophical Practice,* 2017. 12(2): 1935-1946.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 土屋陽介	４．巻 6(3)
２．論文標題 「考える人を育てる教育」はどのようなものであってはならないか：知的徳の教育の観点から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 フィルカル	６．最初と最後の頁 102-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土屋陽介	４．巻 4
２．論文標題 高校公民・中学社会の「倫理的価値の判断」における規範倫理学の影響	５．発行年 2022年
３．雑誌名 開智国際大学教職センター研究年報	６．最初と最後の頁 24-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土屋陽介	４．巻 3
２．論文標題 高校公民・中学社会の実践的指導において新しく求められている教師の哲学的・倫理学的資質	５．発行年 2022年
３．雑誌名 開智国際大学教職センター研究報告	６．最初と最後の頁 24-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土屋陽介	４．巻 71
２．論文標題 知的な安全性について：哲学対話を道徳科の授業の中に取り入れることの可能性と危険性	５．発行年 2022年
３．雑誌名 倫理学年報	６．最初と最後の頁 96-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 土屋陽介	4．巻 2
2．論文標題 河野哲也・はまのゆか・こばようこ著『対話ではじめるこどもの哲学（全4巻）』書評	5．発行年 2020年
3．雑誌名 思考と対話	6．最初と最後の頁 116-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 土屋陽介	4．巻 62
2．論文標題 哲学対話ってなに？：哲学対話とカウンセリングマインド	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東京私立学校保健研究会会誌	6．最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 土屋陽介	4．巻 11月号
2．論文標題 メディアリテラシーとしての「対話的な学び」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教職研修	6．最初と最後の頁 94-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村瀬智之・土屋陽介	4．巻 69
2．論文標題 「子どもの哲学」が問いかけるもの：その教育理論と哲学的問題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 哲学	6．最初と最後の頁 90-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11439/philosophy.2018.90	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 土屋陽介	4．巻 1
2．論文標題 日本の先進的な教育を実践している学校からの示唆：独自の学びを取り入れている三つの学校を訪問して	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ESDの視点に立つ教員養成カリキュラムの開発研究	6．最初と最後の頁 84-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 土屋陽介	4．巻 72
2．論文標題 哲学対話が「哲学」と「対話」の実践であるために：ガート・ビースタの哲学対話教育批判の検討を通して	5．発行年 2023年
3．雑誌名 倫理学年報	6．最初と最後の頁 7-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 土屋陽介	4．巻 2023年4月号
2．論文標題 哲学はどのような意味で現代日本の学校教育に求められているのか：「方法論」としての哲学と、「知識」としての哲学	5．発行年 2023年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 98-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 土屋陽介
2．発表標題 「考える人を育てる教育」はどのようなものであってはならないか：知的徳の教育の観点から
3．学会等名 日本哲学プラクティス学会：第3回大会（オンライン）
4．発表年 2021年

１．発表者名 土屋陽介
２．発表標題 哲学対話はなぜ道徳教育の役に立つのか？
３．学会等名 日本倫理学会：第72回大会（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Tetsuya Kono, Kei Nishiyama, Yohsuke Tsuchiya, Mitsuyo Toyoda
２．発表標題 Repertoires of Philosophical Inquiry: A Practical Application of P4C for Various Purposes
３．学会等名 ICPIC (The International Council of Philosophical Inquiry with Children): The 19th Conference (Habitel Hotel in Bogota, Colombia)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 土屋陽介
２．発表標題 子どもの哲学（哲学対話）の手法を取り入れた大学での哲学教育の可能性
３．学会等名 日本哲学会：第78回大会（首都大学東京）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 土屋陽介・関康平・秋保恵子
２．発表標題 哲学対話と国語教育：「問いを立てる」授業の学校現場へのインパクト
３．学会等名 全国大学国語教育学会：第134回大会（大阪教育大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小川仁志・齊藤元紀・高橋綾・土屋陽介・ほんまなほ・村瀬智之
２．発表標題 日本における「哲学プラクティス」とは何か？
３．学会等名 日本哲学プラクティス学会：第1回大会（明治大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 土屋陽介
２．発表標題 教師は専門職か？
３．学会等名 応用哲学会：第14回大会（オンライン）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yohsuke Tsuchiya
２．発表標題 Philosopher as "the dissensual other": An attempt to bring philosophical radicalism back to P4wC
３．学会等名 ICPIC (The International Council of Philosophical Inquiry with Children): The 20th Conference (Rikkyo University in Tokyo, Japan)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kei Nishiyama, Walter Kohan, Yohsuke Tsuchiya, Minori Goto, Rei Nagai, Arie Kizel, Maria Teresa de la Garza
２．発表標題 Paulo Freire revisited: Critical and creative dialogue with Walter Omar Kohan
３．学会等名 ICPIC (The International Council of Philosophical Inquiry with Children): The 20th Conference (Rikkyo University in Tokyo, Japan)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 江藤信暁・廣畑光希・倉田英・関康平・向井哲和・土屋陽介
２．発表標題 P4Cが学校の中で根付くとはどういうことか？：開智学園における「哲学対話」の10年間の歩みの検証を通して
３．学会等名 ICPIC (The International Council of Philosophical Inquiry with Children): The 20th Conference (Rikkyo University in Tokyo, Japan)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 土屋陽介
２．発表標題 哲学対話が「哲学」と「対話」の実践であるために：ガート・ビースタの哲学対話教育批判の検討を通して
３．学会等名 日本倫理学会：第73回大会（慶應義塾大学）（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計7件

１．著者名 日本道徳教育学会全集編集委員会（編著）、著者多数（土屋陽介含め26名）	４．発行年 2021年
２．出版社 学文社	５．総ページ数 274
３．書名 諸外国の道徳教育の動向と展望	

１．著者名 ラクイチ授業研究会（執筆代表：神戸和佳子・土屋陽介　シリーズ代表：関康平　執筆：江澤隆輔・荻野陽太・古賀裕也・長谷部朋生・廣畑光希・伏木陽介）	４．発行年 2021年
２．出版社 学事出版	５．総ページ数 144
３．書名 中学道徳ラクイチ授業プラン	

１．著者名 土屋陽介	４．発行年 2019年
２．出版社 青春出版社	５．総ページ数 224
３．書名 僕らの世界を作りかえる哲学の授業	

１．著者名 河野哲也、土屋陽介、村瀬智之、神戸和佳子、松川絵里	４．発行年 2018年
２．出版社 毎日新聞出版	５．総ページ数 184
３．書名 この世界のしくみ：子どもの哲学2	

１．著者名 土屋陽介、イクタケマコト	４．発行年 2018年
２．出版社 学事出版	５．総ページ数 40
３．書名 まいにち哲学カレンダー	

１．著者名 ベリーズ・ゴート、モラグ・ゴート（著）、高月園子（訳）、土屋陽介（日本語版監修）	４．発行年 2018年
２．出版社 晶文社	５．総ページ数 224
３．書名 5歳からの哲学：考える力をぐんぐんのばす親子会話	

１．著者名 荒木寿友、藤井基貴（編著）、著者多数（土屋陽介含め15名）	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 248
３．書名 道徳教育（新しい教職教育講座　教職教育編　7）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関